

耕雲庵老師親交の碧雲居先生

(一)

河本 祖舟

先生、本名は大谷 ^{こう}浩、雅号は碧雲居^{へきうんきよ}。明治18年、岡山県津山市山北村生まれ。家は300年続いた大庄屋、城を思わせる広い屋敷には狐も棲んでいたという、鎮守の社があって総灯明の日には30カ所もの小祠を掃除し神燈を点すのが子供の仕事であった。「それが嫌いで今も無宗教に近いのだ」とおっしゃる。俳句は中学時代からで、中央公論に出句し、大谷 ^{ぎょうせき}翹石氏の選を受けている。

美術学校では文芸仲間の一人、岡本一平と当時日本派で高名な内藤鳴雪を尋ね俳句の指導を請うたが受けられず、その代わりに弟子の渡辺水巴を勧められる。二人はその足で水巴を^と訪う。その帰り道である、一平が云うのに、「水巴は^{きつすい}生粋の江戸っ子だ」と。それもその筈、水巴の父 ^{しょうてい}省亭は浅草生れの花鳥画の大家で、若年にして単身フランスへ渡ったというから、当時の日本画に対して一家言の持^{いっかげん}ち主だったことがわかる。その子



大谷碧雲居先生（昭和24年、津山にて）

水巴は当時名門と云われた日本中学を中退し、父の画業をも継がず俳句を志すのであった。それも、子規・虚子・鳴雪の流れの上に自己を客観化し、感興・趣味を止揚した究竟の文学としての「生命の俳句」を標榜するのであった。

水巴を迎えた美術学校の文芸部の仲間には、碧雲居を筆頭に近藤浩一路・岡本一平・池部鈞・朝倉文夫・藤田嗣治等その他が居た。

父省亭の画業を継がず、俳句に走った水巴であるだけに、造形を目指す彼等が一時的にしる俳句という文芸に心を寄せることに内心莞爾たるものがあつたであろう。美の発見といい創造といい、手段方法は異なるにしる内容においては一つなのだから。

先生に俳句の種を植え付けたのは、叔父であり養父となった大谷是空である。是空は大学予備門で子規と同学で、是空が書いた小説を読んだ子規が丁寧に訂正し批評したことから、二人は離れられない仲となる。お百度参りと云って葉書のやり取りが長く続く。二人とも漢詩を作るし、英語も出来た。是空は子規の勧めで俳句を始めている。

是空の名を奇異に思って彼の書いている物を読み漁る中に【是空とは仏語にちなむのは勿論なるも、万事万物皆空なりの私論にして、又わが身を空に置き、しかも瓢然たるなり。】とあつた。郷党の輿望を担って上京したからにはの気概からか睡眠時間も構わず勉強するのが禍いし、脳を病み鼻血と頭痛に苦しむ。医者に勧められ読書を休み転地するのに、受けるだけはと受けてみたら、通っていたというから奇才というか、天才であつたに違いない。

後に郷里の津山中学校の英語教師をしたり、貿易会社に勤め上海に駐在したり、新聞紙上にコラム記事を10年間も続けて書くなど強靱で幅広い自由さがあつた。彼は一子をもうけるが夭逝され、兄の子・碧雲居を養子にした。先生はこの父の許から美術学校へ通っている。

その頃でなかったか、円覚寺の居士林あたりで苦辛せられたというのは、夏の夕べの祝賀会などにはよく支那服を着て来られたが、それ

がとても格好よく会場に涼味を与えたという。先生には禅という宝刀があった。どんな時、どんな処にあっても、それに適合する術を持って居られたという。碧雲居の雅号にしても、「白日青天是家山」の偈げそのままではないか。

中外商業新報に入社して、社会・文芸記者として多忙な中に、自句を整理することもなく、句集を出すことも念頭になかった。編集局長になって間もない頃、水巴の奨めと句友の賛助で、『大谷碧雲居句集』を世に問うことになる。集められた句を自選した300句に寄せられた水巴の序は20ページを超えるもので、初めから終わりまで、先生の天成のおおらかさ、句柄の清朗・温雅さ・飄逸さを賞賛されていて、そのままが先生への愛と期待と信頼を示すものであった。先生は自序で次のように応えられている。

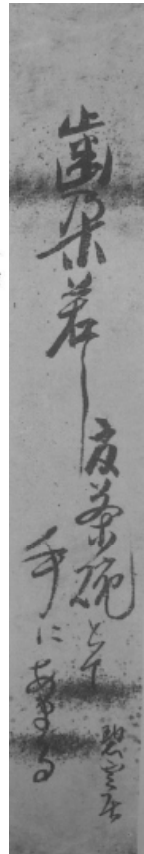
【この句集は人に読んで貰うというよりは私自身を鞭打つ鞭である。水巴先生しんしゃに親炙して30年、その間の先生の進境といえは目を見張るばかりで、決して一所に停滞しないばかりか、颯爽たる意気といい、澆刺たる生氣といい、不勉強な私を発奮させ刺激せずにはおかない。それにもかかわらず、私の句の貧弱なことと言えば、どこに私というものがあるのか。どこに水巴先生多年の薰陶があるのか。】と云うのであった。昭和7年、先生48歳の夏のことになる。

昭和12年、役職は取締役、17年には公務局長、19年には公務局長を辞任する。

東京は焼野ヶ原となり、物資は底をつき、食べるにも事欠く中、昭和20年6月、家材屋財を整理し故山こざんの津山に家族ともども疎開いんせい隠栖される。21年8月水巴先生帰寂されるや遺命通り『曲水』主宰を継承さ

齒しだ采若し夏茶碗とて手にあまる

碧雲居



れるが、そのまゝ津山を動かず。世情は敗戦という未曾有の変動の中、俳誌『柿』・『盆地』を創刊し、指導せられる。その他地域の人々との文人的交流を深められるのである。

紅梅の淡き盛りをつくしけり 碧雲居

後年残された手紙・書画・短冊・色紙・篆刻等^{てんこく}を囲んで先生を偲ぶ回顧展が催されている。また、津山城址にほど近く、大きな自然石に先生自筆の句が刻まれ台座もなしに横たわっている。

秋風や城といふ名に石枯るる 碧雲居

その昔、この地に百姓一揆^{ちようさん}や逃散^{おほ}があったことは、桜の賑わいに蔽われて知る人は少ないと思われる。

いよいよ昭和24年の正月を迎えられた。東京復帰も間近い。

さむざむと光る柱の初日かな 碧雲居

元日の子らよ日輪^{ちゆうてん}沖天す 〃

ひろびろとした部屋の大きな柱も名残り惜しげである。世情もやっと落ち着いて来た、元気を出そうぞと呼びかけられるのである。

青茶筌一つの色に松過ぎし 碧雲居

耕雲庵老師(耕雲庵立田英山老師。人間禅第一世総裁。俳号：幽石)は毎年のように先生に青茶筌を贈られていたという。ほのぼのとしたお二人の交情が目につく。

河鹿鳴くかなしき顔を描かれけり 碧雲居

盃に画筆洗へば鳴く河鹿 〃

石の数が川音となり夏来る 〃

東京復帰を前に、美術学校当時の画友を招いて、奥津温泉^{かじが}かじが荘に清遊されている。

5月14日、津山を去るとして

万緑の雨音終始なきひかり 碧雲居

途中大阪下車、親友 流水居に一泊

松蝉やひらたく並ぶ庭の石 碧雲居

松蝉は人の^{かもく}寡黙に遠きかな 碧雲居

翌日、大田区羽田糺谷の梅花寮に家族ともども入られる。工場の金属音、飛行機の離着音の中にも、近くには海苔の採集加工に忙しい一区域があり、海釣りには事欠かぬ環境なのである。

梅花おわりぬ墳墓の地をここに 碧雲居

東京復帰に骨を折られた中島月笠氏を桐里町に訪われる。

桐の花桐里町が近うなりぬ 碧雲居

六月の天のかがやき声となりぬ //

先生は梅花寮の居室を雨香室と名付け、句誌『曲水』の執務に内に外に忙しい日々が始まる。

某日、外出より帰れば壁間の花筒に一枝の^{たいざんぼく}泰山木、花をつけて^{れいろうふくいく}玲瓏馥郁たり、英山居士の持贈なりという

泰山木活けて土用の水揚げたり 碧雲居

泰山木^{かんでん}早天に花割らんとす //

この2句は毛筆の礼状に添えられている。耕雲庵老師が先生と高尾山に遊ばれ、珠月様（耕雲庵老師ご令室）の実家に一泊せられたのはこの年の秋のことになる。

東京復帰後の仕事としては、新聞記者時代の鋭い感覚で、作句練習会員の熱心な声を吸い上げ多くの復活者を生む。一方新しい支社を次々に誕生させている。

又、水巴亡き後の『曲水』誌の重みを考え、一般の有識者の寄稿を呼び掛け、『曲水』の内容を厚味のあるものに工夫されている。

『曲水』誌上では新しく「曲水の座」の欄を設け幹部に担当させ、「女性のまどぬ」欄を設け、水巴夫人桂子氏を選者に定着させ、又、若い同人が自主的に誌上に寄稿する風潮を生むなど、句誌『曲水』の近代化を図られるのであった。

昭和26年7月、『曲水』創刊35周年記念俳句大会では、出席者百十数人、懇親会は71人の盛況ぶりで、これはひとえに碧雲居先生の熱意

にほかならない。

先生が「私の触角で最近気付いていること」として、「俳句の観念化の傾向である」ことに触れて、

【俳句は短詩型の宿命を負いながらも「有声の絵」として声中自ら画図が展べられてこそ神韻の人に迫るものになる。一つの観念を告白の形でなく昇華させ象徴に持つて行くことが出来れば、自然と具象化になる。それをどうかすると生のまま一足飛びにゴールに突入する。燃烧の手続きを省略したばかりに折角踏みしめた足が大地を離れて宙に彷徨する。これは俳句性を十分見据えていないからで、お互い時々刻々脚下を見定め反省したいことだと思ふ。】と、おだやかな中にも具体性のある先生の俳句象徴論である。

碧雲居時代は長かったとは云えないけれど先生の敷かれたレールの上を各作家一人一人が夢を持ち、自己を攻めることが出来た。それは先生の行き届いた思いやりがあって、安心して自由に伸び伸びと俳句を詠える時代なのであった。それが勇み足であったとしても何時の間にか勇み足をわからして呉れたのである。碧雲居時代は先生のガットの絵のように清貧に甘んじ童心に還って句作が真剣に出来た時代であったのだ。

〔以上は小川原嘸帥氏が「『曲水』900号記念誌」に書かれたものから取る〕

碧雲居先生は昭和27年5月28日、耕雲庵老師持贈の春蘭の鉢を枕頭に置かれたまま、日本医科大学病院で逝去せられる。寿66歳。

中国支部・四国支部の撰心会を追うて先生の訃が鳴門の宿に届いた。それを手にせられた老師はその場に茫然自失せられる。『句津籠』に次の句がある。

大渦は夏の太陽深く呑みし 幽石
松蝉の何も知らずに鳴くことよ ”

つばな光る野みち果てなく逝き給ふ 幽石

3句とも沈痛愛惜の情を秘めた哀悼句として拝唱しています。幽明境を異にした碧先生、これはしたりと膝を打って居られることでしょう。それはそうとして先生は老師より8年の年嵩、句歴にして50年のハンデは別として、老師が先生より学ぼうとせられたことは少なくなかったと思われる。もともと片や科学者肌、片や芸術家肌の違いは隠せないし、絵にしても書にしても、狂歌にしても、篆刻にしても釣にしても、もう5年~10年、お二人の親交が続いていたらと思わずにはいられない。

翌昭和28年正月の『句津籠』につぎの句がある。

初釜や茶筌青きを妻言はず 幽石

年ごとに老師が贈られていた青茶筌に

青茶筌一つの色に松過ぎし 碧雲居

の句をとおして先生を憶念せられるお二人の姿が浮かんでくる。

昭和36年には、先生没後10年を前に、先生の句集出版を待つとして、

君が為春蘭けふを咲き残る 幽石

碧雲居先生は春蘭をことの外愛され、春蘭をモチーフにした句が多い。その上、茶を愛され、秋風やポケットに挽茶十刃の句があるように極上の茶を点てておられたようだ。

先生没後10年に出版された『碧雲居句集』の出版を祝して、渡辺桂子先生は次のような序句を置かれている。

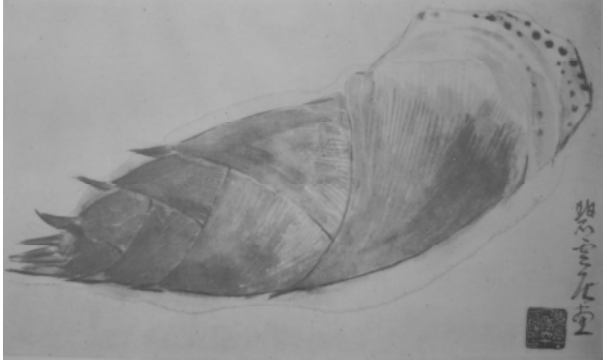
春蘭や茶筌かけおくまどかさに 桂子

いい祝句と存じ上げます。まどかさにが何とも言い難い。桂子先生は、碧先生の後、『曲水』主宰を継承されました。

岡山文庫35『岡山の俳句』に、【家集『碧雲居句集』が昭和8年、また昭和37年『大谷碧雲居句集』が出版された。碧雲居の作品は渡辺水巴も評するごとく玲瓏、円満であって、先鋭、強烈なものではない。

しかし、その底に人間碧雲居が盤石のごとく横たわり、温雅・瓢^{ひょうこ}乎たる中におのずから襟を正さしめるものがある】と誌されてあった。

(つづく)



え
碧雲居畫



華意竹情 雨石刻

(注) 華意竹情：花のこころ、竹のなさけ。

花の香り、竹の緑。

雨石：碧雲居先生の篆刻の号。

著者プロフィール



河本祖舟（本名／雄策）

大正11年、岡山県生まれ。昭和16年、両忘禅協会立田英山居士に入門。昭和25年、人間禅立田英山老師に再入門。現在、人間禅布教師。

軒号／碧水軒。俳号：遊子。